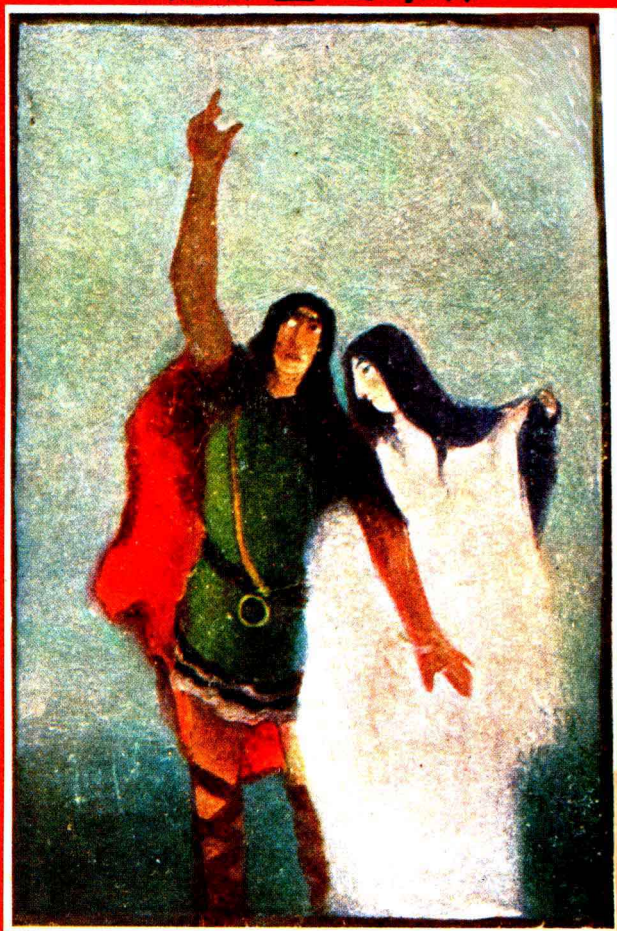


集話童界世

湖の水の女

編吉重三木鈴



行發堂陽春



湖水の女

鈴木三重吉編
水島爾保布畫

(世界童話集)

湖水の女

馬鹿ぞろひ

二人出ろ

龍退治

大正五年十二月十八日印刷
大正五年十二月廿一日發行

湖水の女

實價廿八錢

著者

鈴木三重吉

東京市日本橋區通丁目五番地

發行者

和田利彦

東京市本所區番場町四番地

印刷者

守岡功

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社分工場

發行所

東京市日本橋區
通四丁目五番地

春陽堂

電話本局五十一番

報替一六一七番

45



序

この列冊を、第一に、すべての小さい人たちと、多くの婦人の方々とに捧げたい。

「湖水の女」はウエイルスの傳説、そのつぎの「馬鹿ぞろひ」と最後の「龍退治」とはイタリヤのお伽話、「二人出る」はロシヤのお伽話で、みんなもとの、そのまゝの筋を、私が話し直したのである。

私は、これまで世の中に出てゐる、多くのお伽話に對して、いつも少なからぬ不平を感じてゐた。たゞ話しが話されてゐるといふのみで、いろいろの意味の上品なものが少くない。單に文章から言つても、ずゑぶん投げやりな俗惡なものが多い。この點だけでも子供のために、いかにちがふしい氣持がする。それから、材料そのもの、選びかたにも、

考^{かん}への足^たりないのが往^{わう}々ある。

私^{わたし}はいろんな點^{てん}に十分^{ぶん}注意^{ちうい}して書^かいたつもりである。文章^{ぶんしやう}としては、われ／＼が實^{じつ}さいに使^{つか}つてゐるだけの、平易^{へいい}な純^{じゆん}な口語^{こうご}のみを選^{えら}んで、出^で來^きるだけ單^{たん}純^{じゆん}に書^かかうと努力^{さうりよく}した。

併^{しか}し私^{わたし}は私^{わたし}でまた別^{べつ}の意味^{いみ}の缺^{けつ}點^{てん}を澤^{たく}山^{さん}持^もつてゐないとも言^いへない。みなさんから、どんな小^{ちひ}さいことをも、一^{いち}々^く注^{ちう}意^いしていたゞいて、段^{だん}々^くに惡^{わる}いところを直^{なほ}して行^ゆきたいと思^{おも}ふ。

最後^{さいご}に、表紙^{へうし}の畫^えとさし畫^えとのために多^た大^{だい}な盡^{じん}力^{りき}をして下^{くだ}さる水島^{みづしま}爾^に保布^{ほふ}氏^しに、中心^{ちゆうしん}の感謝^{かんしゃ}を捧^{さか}げたい。

鈴木 三重 吉

湖
水
の
女

一

昔^{むかし}ウエイルスの或^{ある}山^{やま}の上^{うへ}に、寂^{さび}しい湖^こ水^{すゐ}が有^ありました。その近^{ちか}くの或^{ある}村^{むら}に、ギンといふ若^{わか}もの^が母^{はは}親^{おや}と二^{ふた}人^{たり}でくらしてをりました。

或^{ある}日^ひギンは湖^こ水^{すゐ}のそばへ牛^{うし}をつれて行^いつて草^{くさ}を食^たべさせて居^をりますと、ぢき間^ま近^{ぢか}の水^{みづ}の中^{なか}に、知^しらない若^{わか}い女^{をんな}がふうはりと立^たつて、金^{きん}の櫛^{くし}で徐^{じゆ}かに髪^{かみ}を梳^すいて居^をりました。下^{した}にはその顔^{かほ}が、鏡^{かざみ}にうつしたやうに、くつきりと水^{みづ}にうつつて居^をりました。見^みると、それはく言^いふに言^いはれないほどうつくしい女^{をんな}でありました。

ギンはその女^{をんな}がすつかり好^すきになつてしまひまして、しばらくぢつと立^たつて見^みて居^をりましたが、そのうちに自^じ分^{ぶん}の持^もつてゐる、大^{おほ}麥^{むぎ}でこしら

へた麵麴（めんこく）と乾酪（チーズ）を、何だかその女（おんな）にやりたくなりましたので、そつと岸へ下りて

行き

まし
た。



女（おんな）は間もなく、髪を梳（かみ）いてしまつて、

すら／＼とこちらへ歩いて來（き）ました。

ギンは黙（だま）つて麵麴（めんこく）と酪乾（チーズ）をさし出（だ）しました。

女（おんな）はそれを見（み）ると首（くび）をふつて、

「かさ／＼の麵麴（めんこく）を持（も）つた人（ひと）よ。

私（わたし）は滅多（めった）に捉（つかま）りはしません。」

かう言（い）つて、すらりと水（みづ）の下（した）へ

もぐつてしまひました。

ギンはせつかく好（す）きだと思（おも）つた女（おんな）が、

それなり隠れてしまつたものですから、急に悲しくなりまして、牛をつれてしほくと家へ歸りました。そして、母親にそのことをすつかり話しました。

母親は女の言つた言葉をいろいろに考へまして、

「やつぱり、かさ／＼の麴麴は厭だと言ふのであらう。だから今度は焼かない麴麴を持つてお出でよ。」と教へました。

それでギンは、その翌る日には、麴麴粉を捏ねたばかりで焼かないままのを持つて、まだ日も出ない先に、急いで湖水へ出て行きました。

そのうちに日が山から出て、だん／＼に空へ上つて行きました。ギンはそれからお午じぶんまでちつと岸に待つて居りました。けれども、湖水には、たゞ黄色い日の光りがきら／＼するばかりで、昨日の女はいつ

までたつても出て來ませんでした。それからたうとう夕方になりました。ギンはもう諦めて家へ歸らうと思ひました。

すると丁度そこへ、夕日を受けた水の下から、女がやつと出て來ました。そして昨日よりも、もつとうつくしい女になつてをりました。ギンは嬉しさのあまりに口がきけなくて、たゞ黙つて麵麴粉の捏ねたのをさし出しました。

湖水の女はやつはりかぶりを振つて、

「濕つた麵麴を持つた人よ。」

私はあなたのところへ行きたくはありません。

かう言つて、やさしく微笑んだかと思ふと、またそれなり水の下へ隠れてしまひました。

ギンは仕方なしにとぼ／＼家へ歸りました。

母親は話を聞いて、

「それでは固い麵麩も柔らかい麵麩も厭だといふのだから、今度は半焼にしたのを持つて行つて御覽よ。」と言ひました。

その晩ギンはちつとも寝ないで、夜が明けるのを待つてをりました。そしてやつとのこと空が明るくなると、急いで湖水へ出て行きました。

さうすると、間もなく雨が降つて來ました。ギンはびつしよりになつたまゝ、また夕方までちつと立つて居りました。

けれども女は一寸も出て來ませんでした。しまひにはだん／＼と湖水も暗くなつて來ました。

ギンはそれこそがつかりして、もう家へ歸らうと思ひました。

すると、不意に、一と群の牛が湖水の中から浮き上つて、のこ／＼とこちらへ向けて歩いて來ました。ギンはそれを見て、ひよつとするとあの牛の後から湖水の女が出て來るのではないかと思ひまして、びつと見てをりますと、ちやんとそのとほりに、間もなく女も出て來ました。その上に、昨日よりもまたもつと美しい女になつて居りました。

ギンは何とも言ひやうのない程嬉しくて、行きなりざぶりと水の中へ飛び下りて迎ひに行きました。

女は今日はギンがさし出した麵麴を微笑みながら受け取つて、ギンと一しよに岸へ上りました。ギンはそのときに、女の右足の靴の紐の結びかたが、すこし違つてゐるのがちらと目につきました。

ギンは、やうやく口をきいて、

「私はあなたが好きで／＼たまりません。どうか私のお嫁さんになつて下さい。」と頼みました。

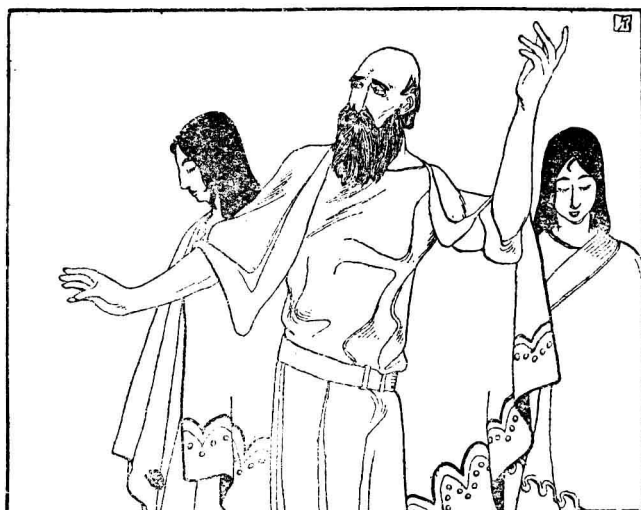
併し女は容易に聞き入れてくれませんでした。ギンはいろ／＼言葉を尽くして、いくども／＼頼みました。女はしまひにやつと承知して、

「それではあなたのお嫁さんになりませう。ですけど、これから先、私が何の悪いこともしないのにお撲ちになると、三べん目には私はすぐに湖水へ歸つてしまひますがようございますか。」と念を押しました。

ギンは、

「そんな亂暴なことは決してしません。あなたを撲つくらゐなら、それより先に私の手を切り取つてしまひます。」

かう言つて堅く誓ひをしました。



さうすると、どうしたわけか、
女は黙つて水の中へ下りて行つて、
牛と一しよにふいと姿を隠してしまひました。

ギンはびつくりして、自分もいきなり後を追つて飛び込もうとしました。すると、後から、

「これ／＼お待ちなさい。そんなにさわがなくてもいい。こつちへお出でなさい。」と、だれだか大聲で呼び留めるものがありました。

振り向いて見ますと、少しはなれたところに、眞つ白い髪をした品のい、お爺さんが、二人の若い女をつれて立つて居りました。ギンはこはごは側へ行きました。よく見ると、その女の一人はたつた今水の中へ消えたばかりの湖水の女でありました。それからもう一人の女を見ますと、不思議なことには、それもさつき自分のお嫁さんになると言つた同じ湖水の女でありました。ギンは自分の目がどうかたつてゐるのではないかと思ひました。

お爺さんは、

「これは二人とも私の娘だが、お前さんはこの二人のどちらが好きなのか、それをちやんと間違ひなく教へておくれなら、望み通りにお嫁に上げませう。」と、やさしく言つてくれました。ギンは一心に二人を見くら

べましたが、二人とも顔も背丈も、着物も飾りも、そつくり同じで、ちつとも見わけが付きません。もし間違へたらそれきりだと思ひますと氣が氣ではありませんでした。けれどもいつまで見較べてゐても判断がつかないので、どうしたらいいかと困つて居りますと、ふと一人の方が、片足をかすかに前へ出しました。それも、目に見えないくらゐほんの少し動かしただけでしたが、一生懸命になつてゐたギンには、その足の靴の紐が、さつきちらと見たやうに、ちがつた結びかたがしてあるのがちやんと目にとまりました。ギンは、やつとそれで見別けがつきましたので、

「解りました。この人です。」と、勇んで前へ出て、その女の手を取りました。